観測水面形を用いた小規模河床形態発生時の流量・粗度係数・河床位・流砂量の推定

九州工業大学工学部 学 生 会 員 〇益崎 大輝 九州工業大学大学院 正 会 員 重枝 未発 九州工業大学名誉教授 フェロー会員 秋山 壽一郎 九州工業大学大学院 学生会員 金屋 諒

1. はじめに

洪水時の水位,流量,抵抗特性,河床位,流砂量の時空間変化等を総合的に把握することは,河道の維持管理を行う上で不可欠である¹⁾. 小規模河床形態の発生は,洪水時の抵抗を変化させることから,その変化の把握は極めて重要である.本研究は,以上のような背景を踏まえ,小規模河床形態の実験結果に基づき水面形の経時変化を与条件とした流量・粗度係数・河床位・流砂量の時空間推定法の予測精度について検討したものである.

2. 水面形の経時変化に基づく流量・粗度係数・河床位・流砂量の推定法の概要

本推定法は、常流を対象に、水 面形と上下流端での河床位の経 時変化を与条件として、1次元浅 水流方程式と流砂の連続の式に 基づき、流量・粗度係数・河床位 の時空間分布を推定する手法で ある.基礎方程式は、式(1)の1次 元浅水流方程式と式(2)の流砂の 連続の式¹⁾である.式(1)の離散化 には流束差分離法を用い、発生・ 消滅ベクトルSについては特性速

 $\frac{\partial U/\partial t + \partial E/\partial x + S = \mathbf{0}; U = (A \quad Q)^T; E = (Q \quad Q^2/A + gI_1)^T; S = (0 \quad gI_2 + gA(S_0 - S_f))^T \cdots (1) }{\partial z_b/\partial t + 1/\{(1-p)B_s\} \cdot \partial Q_B/\partial x = 0 \cdots (2)} \underbrace{U^{t+\Delta t}}_{i} = U^t_i - \Delta t/\Delta x \left[\delta E^-_{i+1/2} + \delta E^+_{i-1/2}\right] \cdots (3) }_{\alpha^T = (\lambda^2 \Delta A - \delta Q)/2; \alpha^T = -(\lambda^T \Delta A + \delta Q)/2; \beta^T = -S_2/2; \beta^T = -\beta^T \Delta C^T_{i+1/2} = \sum_{j=1}^2 \left[\{1 \pm sgn(\lambda^j)\}/2(\lambda^j \alpha^j - \beta^j)\bar{e}^j\right]; sgn(a) = \begin{cases} 1 & a > 0 \\ -1 & a \le 0 \end{cases} \underbrace{\alpha^T = (\lambda^2 \Delta A - \delta Q)/2; \alpha^T = -(\lambda^T \Delta A + \delta Q)/2; \beta^T = -S_2/2; \beta^T = -\beta^T \Delta C^T_{i+1/2} = \sum_{j=1}^2 \left[\{1 \pm sgn(\lambda^j)\}/2(\lambda^j \alpha^j - \beta^j)\bar{e}^j\right]; sgn(a) = \begin{cases} 1 & a > 0 \\ -1 & a \le 0 \end{cases} \underbrace{\alpha^T = (\lambda^2 \Delta A - \delta Q)/2; \alpha^T = -(\lambda^T \Delta A + \delta Q)/2; \beta^T = -S_2/2; \beta^T = -\beta^T \Delta C^T_{i+1/2} = \sum_{j=1}^2 \left[\{1 \pm sgn(\lambda^j)\}/2(\lambda^j \alpha^j - \beta^j)\bar{e}^j\right]; sgn(a) = \begin{cases} 1 & a > 0 \\ -1 & a \le 0 \end{cases} \underbrace{\alpha^T = (\lambda^2 \Delta A - \delta Q)/2; \alpha^T = -(\lambda^T \Delta A + \delta Q)/2; \beta^T = -S_2/2; \beta^T = -\beta^T \Delta C^T_{i+1/2} = \sum_{j=1}^2 \left[\{1 \pm sgn(\lambda^j)\}/2(\lambda^j \alpha^j - \beta^j)\bar{e}^j\right]; sgn(a) = \begin{cases} 1 & a > 0 \\ -1 & a \le 0 \end{cases} \underbrace{\alpha^T = (\lambda^2 \Delta A - \delta Q)/2; \alpha^T = -(\lambda^T \Delta A + \delta Q)/2; \beta^T = -S_2/2; \beta^T = -\beta^T \Delta C^T_{i+1/2} = \sum_{j=1}^2 \left[\{1 \pm sgn(\lambda^j - \beta A + \delta Q)/2(\lambda^j \alpha^j - \beta^j)\bar{e}^j\right]; sgn(a) = \begin{cases} 1 & a > 0 \\ -1 & a \le 0 \end{cases} \underbrace{\alpha^T = (\lambda^2 \Delta A - \delta Q)/2; \alpha^T = -(\lambda^T \Delta A + \delta Q)/2; \alpha^T = -S_2/2; \beta^T = -\beta^T \Delta C^T_{i+1/2} = \sum_{j=1}^2 \left[\{1 \pm sgn(\lambda^j - \beta A + \delta Q)/2(\lambda^j \alpha^j - \beta^j)\bar{e}^j\right]; sgn(a) = \begin{cases} 1 & a > 0 \\ N = 2 + \delta Q + \delta Q$

度で風上化を行った.式(2)の離散化には風上差分を用いた.

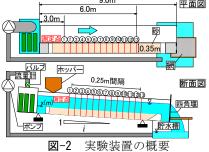
推定手順は、図-1に示す通りである.流量の推定には式(3)の運動方程式を、粗度係数の推定には式(4)の連立1次方程式と式(5)を、河床位の推定には式(2)の流砂の連続の式を、流砂量の推定には式(6)のKovacs and Parker式²⁾を用いた.式(4)の連立1次方程式を解くためには、一区間の粗度係数が既知である必要があるが、本研究では最上流区間の粗度係数を既知とした.なお、本推定法で得られる粗度係数は、摩擦抵抗と形状抵抗に加え、水路側壁による抵抗が含まれる合成粗度係数であるが、河床変動解析では摩擦抵抗のみを考慮している.入力条件の水位、河床位には測定結果を、上流端の粗度係数には実験値のエネルギー勾配から算出した粗度係数を与えた.

3. 実験の概要

実験装置は、図-2に示すような水路長9m,幅0.35mの水路である。河床材料には、砂連が発生しないように³⁾、水中比重1.53、粒径0.601mmの一様砂を用いた。実験は、表-1に示す河床勾配で一様砂を敷き詰めた後、流量を供給し、小規模河床形態が砂堆I(CaseS-DI)、砂堆II(CaseS-DII)、遷移河床I(CaseS-T)、平坦河床(CaseS-D)となる条件がで実施した。なお、流量について

河床(CaseS-F)となる条件 4)で実施した. なお,流量については、浮遊砂が顕著とならず、また、中規模河床形態が発生しない条件下 5)で設定している. 測定項目は水位 $H(\mathbf{m})$,河床位 $z_b(\mathbf{m})$,流量 $Q(\mathbf{m}^3/\mathbf{s})$,流砂量 $Q_B(\mathbf{m}^3)$ である. 水位及び河床位

入力条件: 初期河床位 最上流区間の粗度係数 z_b'とwl'からA',s',B'を算出 ^{di}の推定: ^{z_b 'i+Δi}とwl^{[t+Δi}からA 'i+Δi,s'i+Δi,B 'i+Δi</sup>を算出 A't+Διを用いて式(4), (5)より n¹²の推定: 2乗の補正値n¹²と粗度係数の2乗を算出 式(6)からq_Bを求め式(2)より z_bt+Δt**の**推定: 次の時刻の河床位ス。゚ヒ+ム゚を算出 Z_L 't+ΔtとZ_Lt+Δtとの差が1×10⁻¹⁰(m)以下に 収束判定: の河床位 $z_b^{t+\Delta t}$, 流積 $A^{t+\Delta t}$, 潤辺 $s^{t+\Delta t}$, 水 路幅Вは+Дは、時刻はの粗度係数のだを算出 $Q^{\iota+\Delta\iota}$ の推定:式(3)の運動方程式から $Q^{\iota+\Delta\iota}$ を求める 図-1 推定手順の概要 平面図



女 1				
Case名	河床形態	流量(m ³ /s)	河床勾配	粒径(mm)
CaseS-DI	砂堆I	0.010	1/600	
CaseS-T	遷移河床 I	0.015	1/300	0.60
CaseS-F	平坦河床	0.035		
CaseS-DII	砂堆Ⅱ	0.020		

は、ビデオカメラで撮影した**図-2**の測定点の画像を画像解析することで計測した.流量は、流量計により計測した.下流端の流砂量は、ふるいで回収した砂を乾燥させ重量を計測し、土砂の単位重量で除することで求めた.

4. 推定法の検証

図-3に、各Caseの河床形状、流量、粗度係数の推定結果と実測値との比較を示す.なお、図中には入力条件で

ある水面形の経時変化も示している. これより, 推定結果は、(1)平均的な河床形状の実測値を再現 🖫 していること,(2)流量については,時間平均する とCaseS-DI, T, F, DIIの実測流量をそれぞれ2.5%, 1.0%, 2.7%, 0.4%程度の誤差で再現できること, (3)粗度係数については、時間平均するとCaseS-DI® T, F, DIIのエネルギー勾配に基づく実測値をそ れぞれ2.8%, 1.0%, 3.0%, 0.6%程度の誤差で再 現できること、などが確認できる、図-4に、無次 元掃流力τ*と無次元有効掃流力τ*′,流速係数 $\varphi(=u/u_*)$ の時空間平均値の推定結果と実測値との 比較を示す. なお, 図中には, 各小規模河床形態 🗈 の岸・黒木の式6)に基づく関係も併せて示してい る. これより, 無次元掃流力と無次元有効掃流力 の関係は、CaseS-DIで若干の差異はあるものの、 岸・黒木の式との関係に沿っており、各小規模河気 床形態の変化による無次元掃流力と無次元有効 掃流力の関係や抵抗特性の変化を再現している ことが確認できる.図-5に、流砂量の推定結果と 実測値との比較を示す.これより、推定結果は、 (1)流砂量がCaseS-F, DII, T, DIの順で大きくな ること、(2)時間平均するとCaseS-DI, T, F, DII の実測値をそれぞれ102.8%, 102.5%, 5.0%, 39.6%程度 の誤差で再現できること、などが確認できる。図-6に、 岸・黒木の式⁶の無次元有効掃流力とKovacs and Parker 式2)の流砂量,流砂量の推定結果と実測値との比較を示 す. これより, 推定結果は, (1)CaseS-Tについては流砂 量の実測値が流砂量式よりも小さく, 遷移領域での式(6) の適用性が低いこと, (2)CaseS-DIIについてはCaseS-Tに

比べ,式(6)の適用性は高いこと,などが確認できる.流砂量が無次元有効掃流力の1.5乗で求められることを踏まえると,CaseS-DI,T,F,DIIの無次元有効掃流力の推定結果と実測値との間には,それぞれ60.2%,60.1%,3.4%,24.9%程度の差が生じたと考えられる.

4. おわりに

本研究から、本推定法は、局所的な河床位や粗度係数や流砂量の 再現性には課題が残るものの、小規模河床形態発生時の平均的な河 床位と流量、粗度係数を再現できることが確認された。このように、本推定法は、

水面形の情報から、小規模河床形態発生時の抵抗やその時の流砂量の推定に有用なツールであると考えられる。 参考文献:1)国土交通省:河川砂防技術基準調査編,2012.,2) Kovacs, A. & Parker, G.: Journal

参考文献: 1)国土交通省: 河川砂防技術基準調査編, 2012., 2) Kovacs, A. & Parker, G.: Journal of Fluid Mechanics, Vol. 267, pp. 153–183, 1994., 3) 水理委員会移動床流れの抵抗と河床形状研究小委員会: 土木学会論文報告集, 第210号, p65-91, 1973., 4)黒木ら: 水理講演会論文集, 第29巻, pp.461-466, 1985., 5) 黒木・岸: 土木学会論文報告集, 第342号, pp.87-96, 1984., 6)岸・黒木: 北海道大学工学部研究報告, 第67号, pp.1-23, 1973.

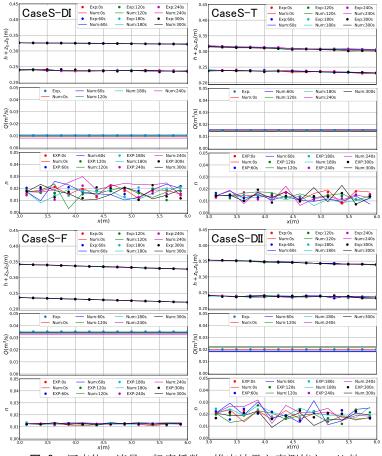


図-3 河床位,流量,粗度係数の推定結果と実測値との比較

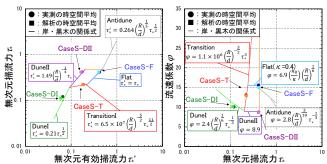
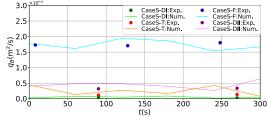


図-4 無次元掃流力と無次元有効掃流力,流速係数の関係



☑-5 下流端流砂量の推定結果と実測値との関係

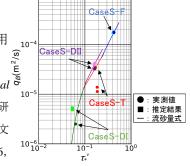


図-6 流砂量式との比較